

企業選択支援のためのワークシート開発と 個別カウンセリングを通じた自己効力感の強化

Developments of Worksheet and Enhancing Self-efficacy Through Individual Counseling

濱田 佳奈子* 久保田 真一郎* 都竹 茂樹** 中野 裕司*
Kanako HAMADA Shin-Ichiro KUBOTA Shigeki TSUZUKU Hiroshi NAKANO

* 熊本大学 ** 大阪大学
* Kumamoto University **Osaka University

＜あらまし＞ 本研究では、就職活動における志望企業の選択に難しさを感じている学生を対象に、企業選択支援のための講座を設計、開発、実践した。その結果、講座や講座内で用いたワークシート、講座中盤での個別カウンセリングによる企業選択支援への有効性を示すことができた。また、講座中盤の個別カウンセリングが自己効力感向上を促し、自信を持って企業選択ができるようになることが示唆されたことから、企業選択への支援、指導方法の一つの方向性も示すことができた。

＜キーワード＞ キャリア教育、就職活動支援、自己効力感

1. はじめに

就職活動生にとって、自分自身で受験企業を選択することは、自律的なキャリア形成を行う上でも、就職後のミスマッチや早期離職を防止する上でも重要である。しかし、筆者が担当している正課外の就職活動支援講座に参加する大学生の多くが、志望企業を決めることができず、「就活がうまくいくかわからない」、「内定をもらえるのだろうか」といった不安をもち、就職活動への意欲が低下していた。これまで大学3年生向けの就職活動支援講座では、志望企業が決まっている前提で、応募書類の書き方や面接対策といった就職活動の実践的な対策を指導する内容を行っており、受験企業の選択に悩む学生への支援や課題解決のための教育的介入ができていなかった。また、進路選択において自己効力感の重要性がさまざまな先行研究で示唆されている中で、「やってみよう」「うまくいこう」といった自己効力感を持たせ、自ら進んで企業選択を行えるようなアプローチを行っていなかった。そこで、進路選択に必要な自己理解・職業理解・両者のマッチングという3要素を実践し、自分自身で整理、可視化できるような講座を設計し、自己効力感を高めるアプローチを通じて、自ら進んで企業選択をすることを支援する必要があると考えた。

2. 研究方法

筆者が担当している私立大学Aでの就職活動支援講座を履修する大学3年生14名（全員文系）を対象として、就職活動が本格化する直前の9～12月に本講座を実施し、その有効性を分析した。

3. 講座の設計・開発

特性因子理論（Parsons, 1909）に基づき、授業プロセスを構成した。特性因子理論とは、その人を構成する特性（スキル、能力、性格、価値観等）と、その職業の条件（仕事内容や仕事に必要な要件）を上手くマッチングさせることが重要であるというキャリア理論の一つである。

学習目標は、「1. 自身の興味、目標、価値観、得意なこと、それらを形成した経験を言語化できる。2. 1をもとに、企業や職種、仕事内容について自分自身で調べることができる。3. 自己理解とさまざまな職業を関連づけて、自分の特徴をどう活かせるのかを記述することができる」とした。

学習活動では、職業選択研究の一つである特性因子理論の自己理解・職業理解・両者のマッチングという3要素を実践し、それらを3回（3社分）練習することで、自己理解や職業理解をふまえた受験企業を挙げ、自己と企業のマッチングを言語化できることを目指し

た。また、講座終了後や就職活動開始後も一人でマッチングを行えるようにするために、特性因子理論の3要素の項目と、それぞれの関係性を整理、明確にするためのワークシートをExcelで開発し、学習活動に用いた。さらに、職業選択をしたことのない学生が、自己と職業・企業のマッチングに対して合理的な推論を行い、自信を持って企業選択できるように、自己効力感を高めるアプローチとして、全12回の講座の中盤に、個別カウンセリングを設定した。

4. 研究の結果

特性因子理論の3要素（自己理解・職業理解・両者のマッチング）を実践し、それらを3回（3社分）練習することで、自己理解や職業理解をふまえた受験企業を3社以上選択できるようになった。学習目標に基づいて作成した事前・事後アンケートの結果から、設問項目すべてにおいて、平均値、中央値のポイントが上昇した。特に、「志望企業が決まっている」という企業選択を支援する本講座で最も重要な項目では、最頻値が2ポイント上昇し、満点の5.0となった。さらに、「自分自身の強みを3つ以上言える」、「3つ以上の自分自身の強みを証明できるエピソードを言える」という自己理解に関する項目で、平均値が高く上昇しており、講座後は自己理解に自信を持っていることがわかる。また、講座中盤に実施した個別カウンセリング前後のワークシートの記述から、特性因子理論の3要素の達成度に違いがあるかを確かめたところ、14名の受講者全員が、個別カウンセリング後にワークシートの評価が向上し、企業選択における3要素（自己理解、職業理解、両者のマッチング）のうち、最も課題を抱えていた「両者のマッチング」に関する項目では、全員が満点を達成した。

また、個別カウンセリング前後で、自己効力感が向上し、自己理解に基づいた企業選択を行えるようになったことも確認できた。自己効力感を高めるためのアプローチとして実施した個別カウンセリングの評価には、浦上(1995)の「進路選択に対する自己効力尺度」を用い、個別カウンセリング前と後に学生に自己評価を行ってもらった。本尺度は、30項目4件法で構成されており、選択した数値を点数化し、各項目の平均値、中央値、最頻値のポイントを算出した。自己効力尺度のポイントの平均値が同等、または上昇していた項

目は、30項目中25項目に及んだ。平均値が0.4ポイント以上上昇した項目は、「3. 一度進路を決定したならば、『正しかったのだろうか』と悩まないこと」や「6. 人間相手の仕事か、情報相手の仕事か、どちらが自分に適しているか決めること」、「16. 自分の才能を、最も生かせると思う職業的野を決めること」、「18. 現在考えているいくつかの職業の中から、一つの職業を絞り込むこと」、「23. 自分の将来設計に合った職業を探すこと」といった、自己理解に基づいた選択、意思決定に関する内容であった。また、事後アンケートにおいて、「企業選択の幅が広がった」や「職種選択の幅が広がった」、「就活に対する疑問が減った」や「就活に対する不安が減った」は、半数以上が「当てはまる」と回答しており、個別カウンセリングの目的であった自己理解と職業理解のマッチングへの支援、さらに、自己効力感向上を目指した個別カウンセリング内容の成果と考えられる。

本講座は文系学生が対象であったが、企業選択に必要なステップは属性に依存しないことから、他分野の学生にも活用できる内容だと考えられる。

以上の結果により、本研究が、企業選択支援のための授業や指導、支援方法を考える一助になると思われる。

5. 今後の課題

今後の課題は、講座内容やワークシートの改善を試み、運営方法を検討することである。本講座の学習者が、就職活動において本講座での学習成果やワークシートをどのように活用し、結果としてどのような進路を選択したのかということについても、検証が必要である。また、講座内で教員による個別カウンセリングを実施することから、継続的な講座にする場合や、受講人数を拡大する場合には、より効率的な運営方法の検討が必要である。さらに、就職活動中にも効率的に学習を進めてもらえるよう、学習の時間や場所においてより自由度の高い遠隔教育の形式で本講座の学習を提供できないか検討したい。

参考文献

- Parsons, F. (1909) Choosing a vocation. Houghton Mifflin.
- 浦上昌則(1995a) 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究. 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 42:115-12